

## 論文

# Lazamon's *Brut* の Caligula 写本5105 行目の *pissere folc riche* の解釈について

新 川 清 治

On the Reading of *pissere folc riche* (1.5105) in the  
Caligula Manuscript of Lazamon's *Brut*

SHINKAWA Seiji

## 序 論

本論では Lazamon's *Brut* (c. 1200)<sup>(1)</sup> の Caligula 写本 (British Museum MS. Cotton Caligula A. ix) 5105 行目の *pissere folc riche* に関して、従来の説を含めて理論的に可能な複数の解釈を提示し、それぞれの妥当性を検討していく。字句に関しては後に示す3つの刊本に異同はなく、特に問題とされることはない。また、内容解釈上も大筋は明瞭である。しかし、その自然な解釈には文法上の「誤り」が伴う。単純に写字生の転記ミスとする説明も有力であるが、字句を改めることなく解釈する可能性を中心に模索したい。

*Brut* には Caligula 写本以外にもう1つ、Otho 写本 (British Museum MS. Cotton Otho C. xiii) がある。何らかの理由で原文に疑問がある場合、

それぞれの読みを参考にすることが普通に行われるが、残念ながら、今回は Otho 写本に該当個所がないために利用できない。

### 解釈① ‘this rich folk’

以下に、該当個所周辺の Madden (1847) によるテキストと訳を挙げる。  
訳はテキストの行に合わせて改行している。

her wes unimete fare:  
a pissere folc riche. (10236-37)

here was fare without measure  
among this rich folk.

行番号が違うのは主に Madden (1847) が半行を 1 行としているためで、今日最も広く用いられている Brook & Leslie (1963-78) では 5105 行に当たる。以下、Madden (1847) からの引用には Brook & Leslie (1963-78) の行ナンバーを角括弧で添えることにする。指示代名詞 *pissere*、形容詞 *riche* がともに名詞 *folc* にかかるとし、‘this rich folk’ と解釈している。ここで問題となるのは、*folc* が中性名詞であるにもかかわらず、それに呼応する指示代名詞が女性形を取っていることである。<sup>(2)</sup> Madden (1847) も “Elsewhere *folc* is neuter, as in A.-S.” (3: 482) と、この問題を指摘しているが、理由には触れていない。

Brook & Leslie (1963-78) も同じテキストを与えているが、訳や注がなく、彼らの解釈は判断できない。その版を基に Barron & Weinberg (1995) は一般向けの対訳版を出版している。読みやすさを重視するため、句読法が現代風に改められており、該当個所も行間休止符号 (:) を欠いているが、テキストは同じである。以下のような訳が付与されており、Madden

Lazamon's *Brut* の Caligula 写本5105行目の *piessere folc riche* の解釈について  
(1847) と同様の解釈をしていることが分かる。

there were provisions in plenty in this prosperous country.

一般向けとは言え、従来の読みに従わない時など内容の理解にとって重要なことに関しては注が付されているが、この箇所に関しては何も言及されていない。

性の不一致以外に問題があるとするれば、*folc* の語形がある。前置詞 *a* の目的語となっているので、与格形の *folke* などとなっているべきであるが、語尾を欠いている。確かに語末の *-e* は脱落する傾向を示しているが、Caligula 写本では屈折が比較的良好に保存されていることも忘れてはいけない。<sup>(3)</sup>

こうした文法上の不具合があるにもかかわらず、主要な刊本が同じ判断を示していることはこの解釈の自然さを物語っている。さらに、同一写本内に *folc* が *riche* によって形容されている例が3つあり、この解釈の妥当性が裏付けられているように思われる。以下に Madden (1847) のテキストと訳を引用する。訳には紙面節約のためのさまざまな工夫がなされているが、読者の便宜を図って、そうしたものは一切廃し、また、テキストの行に合わせて改行するなど、筆者が編集を加えている。

Pe king him com riden:  
mid riche his folke. (532-33 [268])

The king came riding towards him,  
with his noble folk;

Pa spak þe king balde:  
to riche his folke. (24975-76 [12464])

Then spake the bold king  
to his noble folk:

And al mi uolc riche:  
sette to fleme. (28054-55 [14002])

And all my good people  
set to flight,

最初の2つは前位修飾の例であり、最後は該当個所と同じ後位修飾の例である。

このように、この解釈の問題点は指示代名詞の語形のみと言ってよく、写字生の転記ミスなどの誤りと考えると問題が解決する。有力な解釈と言えるだろう。

## 解釈② ‘these folks’ kingdom’

上記の性の不一致の問題は *bissere folc* を複数属格形とし、それが形容詞 *riche* の同音異義語である名詞 *riche* ‘kingdom’ を修飾していると考えることで回避できる。これに従うと ‘these folks’ kingdom’ という読みが与えられる。Madden (1847) の Glossary には該当個所の *folc* が複数属格形として挙げられている (3: 555)。訳や注のコメントと矛盾するが、この解釈の可能性も検討されていたことが窺われる。

問題点としては、まず、解釈①と同様に *folc* の語形が挙げられる。複数属格形の *folke*、あるいは弱変化からの類推形 *folkene* などが期待されるが、語尾がない。しかし、これは単なる語末の *-e* の脱落と説明可能であることは上述の通りである。

より大きな問題は非支配階級の *folc* が支配階級の所有物である *riche* を

修飾する意味上の不調和であろう。属格の示す意味は様々であるので可能性がないとは言えないが、「人々の王国」というのはやや不自然に響くように思われる。この不自然さは *folcmægð* ‘tribe, nation’ という古英語の複合語を参考にとすると分かりやすい。第2要素の *mægð* は *riche* と同様に「国」の意を表すが、*riche* が支配者の力が及ぶ範囲を言うに対して、身内、一族、民族、国民の住む場所を意味する。こちらは *riche* と違って、同じ被支配階級を示す *folc* との間に意味の衝突がない。

この解釈の最大の利点は原文そのままの解釈を許すことであるが、意味上の問題が残る。それでは、明らかな文法上の不都合を抱える解釈①とどちらの妥当性が高いであろうか。類例の裏付けがある分、解釈①が優位に立つように思われる。

### 解釈③ ‘this folk-/folks’ kingdom’

もう1つの可能性として、*folc riche* を複合語とし、*pissere* がそれと呼応しているとの解釈を示してみたい。これに従うと、‘this folk-kingdom’ という読みが得られる。解釈②と同様に *folc* を複数属格と理解し、‘this folks’ kingdom’ 考えることも可能である。この2つの解釈に共通する問題は、*folc* と同様に中性名詞である *riche* が女性形の指示代名詞とともに用いられる性の不一致と、*folc* と *riche* の意味の衝突である。すなわち、この解釈は解釈①と解釈②の両方の問題点を同時に含む訳である。

その分、妥当性が著しく損なわれるものと思われるが、*riche* は女性名詞へ性変化しているようで、実際には1つ目の問題は存在しない。*Caligula* 写本には *riche*、あるいは、それを第2要素とする複合語と呼応している単数形の指示代名詞が48例あるが、その中、中性形は7例のみで、後はすべて女性形である。また、人称代名詞との呼応においても中性形は6例中2例のみで、残りは女性形となっている。

2つ目の *folc* と *riche* の意味の衝突の問題はそのまま残る。古英語に

も中英語にもここで提案している *folc-riche* のような複合語は見られない。しかし、*a pissere folc riche* とよく似た外見を持つ *a pissere weorlde riche(n)* ‘in this world-/world’s kingdom’ という表現が Caligula 写本内に 14 例見られ、<sup>(4)</sup> *folc riche* が本来的に全く別の構造をしていたとしても、この例からの類推で複合語、あるいは属格名詞＋名詞として再分析された可能性が十分に考えられる。第 1 要素として *folc* を持つ複合語、第 2 要素として *riche* を持つ複合語が少なからずあることがこの再分析を容易にしていると言えるかも知れない。<sup>(5)</sup> また、複合語と考えると *folc* に複数属格、単数与格などの語尾がないことも説明される。

一見して、最も妥当性の低い解釈であるが、*riche* が性変化している事実、類似表現の類推作用を考えると、解釈①に匹敵する説得力を持つように思われる。

## 結 論

これまで Lazamon’s *Brut* の Caligula 写本 5105 行目の *pissere folc riche* に関して、3 系統の解釈を提示し、それぞれの妥当性を検討してきた。解釈①の ‘this rich folk’ は最も自然であるが、性の不一致の問題を含み、解釈②の ‘these folks’ kingdom’ は文法上の不都合はないが意味に疑問を残す。解釈③の ‘this folk-/folks’ kingdom’ も解釈②と同じ意味上の問題を含むが、類似表現から複合語、あるいは属格名詞＋名詞と再分析されている可能性を示している。

偶発的な誤りの可能性を廃すれば、該当箇所を転記した際、写字生の頭にあったのは解釈③であったと筆者は判断する。ただ、解釈の自然さ、類例の存在を考えると、オリジナル写本の読みは恐らく解釈①であっただろう。後置された形容詞 *riche* が名詞と再分析され、誤った女性形指示代名詞が付与されるに至ったものと考えられる。

## 注

- (1) 作品に関する情報は Hartung (1989, 2613-17) を参照。
- (2) 以下は Caligula 写本における指示代名詞 *þes* の変化を簡略化して示したものである。

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	<i>þes</i>	<i>þis</i>	<i>þeos/þas</i>	<i>þas/þeos</i>
属格	<i>þisse(s)</i>	<i>þisse(s)</i>	<i>þisse(re)</i>	<i>þisse(re)</i>
与格	<i>þisse(n)</i>	<i>þisse(n)</i>	<i>þisse(re)</i>	<i>þisse(n)</i>
対格	<i>þisne/þesne</i>	<i>þis</i>	<i>þas/þeos</i>	<i>þas/þeos</i>

- (3) 語末の *-e* の脱落に関しては Lass (1992, 79-81) を、Caligula 写本の古い、あるいは古風な性格については Hartung (1989, 2613) を参照。
- (4) 綴りのバリエーションは無視している。ここにおいて *pissere* は属格とも与格とも解釈することができる。
- (5) 第1要素として *folc* を持つ古英語の複合語には *folccyning* 'folk-king'、*folcland* 'folk-land'、*folcright* 'folk-right' などがあり、第2要素として *riche* を持つものには *woruldric* 'world-kingdom' 以外に *cynerice* 'kingdom'、*heofonrice* 'heaven-kingdom' などがある。

## 引証文献

### 第1次資料

Barron, W. R. J., and S. C. Weinberg. ed. 1995. *Lazamon's Brut or Hystoria Brutonum*. Essex: Longman.

Brook, G. L., and R. F. Leslie ed. 1963-78. *Lazamon: Brut edited from British Museum MS. Cotton Caligula A. ix and British Museum MS. Cotton Otho C. xiii*. 2 vols. EETS, 250, 277. London: OUP.

Madden, Sir Frederic. ed. 1847. *Lazamons Brut, or Chronicle of Britain; A Poetical Semi-Saxon Paraphrase of the Brut of Wace*. 3 vols. London: The Society of Antiquaries of London.

新 川 清 治

第2次資料

Hartung, A. E. ed. 1989. *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*. Vol. 8. Hamden: The Connecticut Academy of Arts and Sciences.

Lass, Roger. 1992. "Phonology and Morphology." *The Cambridge History of the English Language*. Vol. 2. Ed. Norman Blake. Cambridge: CUP. 23-155.

(本学経営学部准教授)